

Network

特別講演「緩和ケア病棟の機能と役割について」

開催日：2014年10月8日 講師：広島県緩和ケア支援センター長 本家 好文 先生

広島共立病院 院長 村田 裕彦

広島共立病院は、9月1日より新病院で医療活動を開始致しました。新しい病院では、これまでの急性期と回復期の医療に加えて「がんの緩和ケア」に取り組むことを決め準備を行って参りました。9月に一ヶ月の実績をつくり、10月から「緩和ケア病棟」が稼働しました。安佐地域に初めてとなる「緩和ケア病棟」の誕生です。国民の3分の1ががんで亡くなり、そのほとんどが病院で最期を迎えています。「緩和ケア病棟」が果たす役割や求められる機能とは。長年、広島県で緩和ケアの普及や教育について中心となって担ってこられた広島県緩和ケア支援センター長・本家好文医師を講師に、特別講演会を開催しました。



冒頭、がん医療に関わる医療情勢について共有。がんによる死亡者が年々増加するなかで人生の最期をどこで迎えるのが、迫りくる超高齢化社会とともに大きな課題となっていること、その受け皿となる医療提供体制も、広島県内で緩和ケア病棟を有する医療機関は10施設でベッド数は154床に留まっている現状について学びました。

緩和ケアについて、緩和ケアの概念・ケアの目的・患者や家族の思いを尊重することの大切さ・緩和ケア病棟が地域で果たす役割、の4つの角度から解説して頂きました。緩和ケアは、がんと診断された時から開始され、“その人らしく生き抜いていく”ためのケアであること、ケアの目的も生を取り戻すことではなく、残された時間を病気とともに生きていくこと、その人にとって良い時間を過ごしてもらうことが大切であり、様々な痛みやつらさに寄り添っていくことが最も重要なことと話されました。

死を受入れて最期を迎える患者や家族にとって、その時間はかけがえのないものです。「信頼できる医師や看護師のなかで穏やかな気持ちで最期を迎えたい」「身体に苦痛がなく話を聞いてもらいたい」「残された時間を知りたい」「仕事や家事の

こと、会いたい人に会うことを大事にしたい」。患者や家族が緩和ケアに期待すること、求めていることをいかに提供するケアに反映させるのか、その大切さについて話されました。そして最後に、緩和ケア病棟について「患者や家族に療養の場を提供し、看取りを行うことが、一般病棟と最も異なる点である」と強調され、病棟での専門的なケアの提供はもちろんのこと、地域のなかで相談・連携機能を強めて在宅でも安心して過ごせる関わりが重要だと結ばれました。

参加者からは、「がん死亡者のどの程度を緩和ケア病棟で関与することが理想なのか」「緩和ケア病棟での長期入院患者への対応について」「病棟のケアの実際に見合う医療提供体制について」などの質問が出され丁寧に答えて頂きました。豊富な経験と様々な資料に基づいた講演で有意義な時間となりました。

本家先生の講演が活かされるような緩和ケア病棟を運営し、安佐地域の緩和ケアの普及に貢献できるよう努力していきたいと思えます。

